

職業選択に対する学生の考え方と親への相談状況との関係

— 新入生を対象にして —

In Reference to Students Views on Career Choices,
along with the Effects of their Consultation with Parents

— This Research Covers only Freshmen —

北 原 佳 代
Kayo KITAHARA

佐々木 美 樹
Miki SASAKI

岡 部 恵 子
Keiko OKABE

要旨

本学1年生（看護学科，保育科，人間生活学科人間福祉専攻・食物栄養専攻）283名を対象に，入学動機とその決定に対する親の関与状況について質問紙調査を行った。

その結果，本学への進学を決定した理由は「目指したい職業の免許・資格を取るため」が66.1%で最多であった。親への進学に関する相談内容は，「本学を受験すること」「受験校の選定」について含め41.4%，次いで「将来や進路の選定について」が33.3%であった。進路決定時期は，中学校以前が48.4%で，高校時代が47.3%であった。親からの職業選択に関する影響度で，「全くなかった」と答えたものが42.8%であり「大いに受けた」15.5%で，最多だったのは看護学科の40.0%であった。

今回の調査から，学生は職業選択についての意思決定を既に中学時代という早い時期に行っていることがわかった。このような学生の主体性を尊重し，支援することの重要性が示唆された。

キーワード：入学動機，親の関与，職業選択，進路決定

I. はじめに

本学は看護学科、保育科、人間生活学科人間福祉専攻（以下、福祉専攻と略す）、人間生活学科食物栄養専攻（以下、栄養専攻と略す）、及び日本語コミュニケーション学科の4科より成り、日本語コミュニケーション学科以外の3学科は看護師、栄養士、介護福祉士、保育士、幼稚園教諭といった資格取得を可能にする短期大学であり卒業後は学生時代に取得した資格をもって就職する者が大部分である。本学の入学が将来への社会の中での生き方を決めていることでもあるといえよう。

フリーターの増加が社会問題として挙げられている現状である。そうした中で資格取得を目標に入学してくる本学の学生は職業選択の方向を既に意思決定をしており、自らの社会での生き方を決めている。すなわち、社会参加への責任を果たそうとしているといえよう。それゆえ教員は、そうした学生の意思を尊重し、よりよい職業人としてのスタートをとれるように支援するという役割をもつ。しかし、これら学生の入学時の年齢、すなわち、18歳という青年期初期での意思決定であり、揺らぎといった青年期の発達課題を抱える中での意思決定である。そこで、青年期の特徴を理解しての親と教員の支援が必要になる。

岡本は「今わが国の社会を特徴づけるのは、価値の多様化である。何を選ぶかは個人の責任のもとに原則として自由であり、女性の生き方やキャリア形成も各自の欲求や価値観に沿って選択される。」¹⁾、「しかし多様な選択肢は選ぶ自由さがある反面、どれを選ぶべきかという迷いを生み、1つの可能性に賭けることをためらわせる。」²⁾と述べている。また、柏木は「昨今は、学生の間でも資格志向が強いといいますが、『自分が何をやりたいかわからないけれど、とりあえず資格をとって手に職をつけておけば何とかなるだろう』という、その場しのぎの結論先送りでなければ良いのだが、という気がしてなりません。」³⁾と述べる。

そこで、職業上の資格取得を可能とする本学への学生の入学動機とその決定に対する親の関与の状況を調査することを通して、学生生活の中で今後の学生への教員としての関わりについて考えることを目的として研究に取り組んだ。

II. 研究目的

卒業することで資格取得につながる短期大学へ入学した学生の、資格取得に対する考え方および学生の意思決定に対する親の関与の状況について明らかにすることを通して、資格取得過程の学生生活に対する教員の関わりを考える。

III. 研究方法

1) 研究方法

調査研究

2) 調査期間

平成16年12月15日から平成16年12月20日

3) データ収集の方法

質問紙によるアンケート調査 集合調査法にて実施。

対象者：看護学科 1年生 (40名) 保育科 1年生 (130名)

福祉専攻 1年生 (32名) 栄養専攻 1年生 (81名)

4) データの集計方法

単純集計およびクロス集計を行った。

IV. 倫理的配慮

1) 本学各学科の責任者である教授に研究の趣旨を文書にて説明し、協力を依頼する。

2) 学生へのアンケート調査にあたっては、以下のように配慮する。

①対象者に本研究の主旨・目的を口頭で説明するほか、調査用紙にも記述する。

②研究協力に関しては、研究への参加は自由意志であり、拒否してもよいことを伝え、回収は封書をもって行う。調査は無記名で行い、結果は個人が特定できないように配慮する。

③データの取り扱いには研究者のみが関わり、調査書の保管等には万全を期し、かつ、統計処理後は消去することを伝える。

④研究結果の公表には対象者が特定できないように配慮する。

V. 結果

質問紙の回収率は各学科とも100%であった。有効回答数は質問項目により異なり、項目ごとに無回答数を表示した。

1. 対象の属性

1) 性別及び年齢

調査対象者は女子272名 (96.1%)、男子11名の283名 (3.9%) であった。学科別には、看護学科40名 (女子38名、男子2名)、保育科130名 (女子123名、男子7名)、福祉専攻32名 (女子30名、男子2名)、栄養専攻 (女子81名、男子0名) であり、男子11名中7名が保育科であった。

対象の年齢は、18～19歳が264名 (98.2%)、20歳代以上は栄養専攻に3名、保育科1名、看護学科に30歳以上が1名であった。

2. 家族の状況

1) 両親の年齢

父親の年齢には231名が回答し、50～59歳が113名（48.9%）、次いで40～49歳107名（46.3%）であり、40～59歳が95.2%である。（無回答52）

母親の年齢は244名が回答し40～49歳172名（70.5%）、次いで50歳～59歳で62名（25.4%）であり、父親と比して50歳代が少なかった。（無回答39）

2) 両親の職業

職業に関して以下8つの分類で集計した。

- ①医師，歯科医師，看護師，薬剤師，介護士，歯科技工士・衛生士，ヘルパーなど医療に關係する資格を要する職業
- ②学校教員，講師，研究者，幼稚園教諭，保育士など教育資格を要する職業
- ③栄養士，調理師，警察官，自衛官，消防士，美容師など①②以外で何らかの資格を要する職業
- ④公務員，事務員，病院職員などいわゆるサラリーマン
- ⑤小売，販売業，サービス業關係など自営業
- ⑥設備，運輸，農漁業など
- ⑦パート・アルバイト・フリーターなど不定の職業
- ⑧その他

父親の職業の有無について260名が回答し、有職者256名（98.1%）、無職者が1.9%であった。職種は各学科とも会社員，自営業が多く合わせると180名（79.3%）であった。

母親の職業の有無については272名が回答し、有職者199名（73.2%）、無職73名（26.8%）であった。（表1）有職者のうち職種について回答したのは166名で有職者のうちの最多はパート・アルバイトで58名（34.9%）であった。（福祉専攻で7名41.2%、次いで保育科が30名40.5%、栄養専攻13名31.7%、看護学科8名23.5%）。看護学科では医療系の職業に就いているものが14名（41.2%）あり、他の学科に比して30～35%の差が多かった。

表1 母親の職業の有無

		人数 (%)				
有無	学科	看護学科	保育科	福祉専攻	栄養専攻	計
有		35 (87.5)	85 (68.5)	21 (67.7)	58 (75.3)	199 (73.2)
無		5 (12.5)	39 (31.5)	10 (32.3)	19 (24.7)	73 (26.8)
計		40	124	31	77	272

表2 母親の職種

人数 (%)

職種	学科	看護学科	保育科	福祉専攻	栄養専攻	計
①医療に関係する資格を要する職業		14 (41.2)	4 (5.4)	2 (11.8)	4 (9.8)	24 (14.5)
②教育資格を要する職業		0	3 (4.1)	0	4 (9.8)	7 (4.2)
③①, ②以外の資格を要する職業		1 (2.9)	4 (5.4)	0	1 (2.4)	6 (3.6)
④サラリーマン等		7 (20.6)	16 (21.6)	1 (5.9)	11 (26.8)	35 (21.1)
⑤自営業, 販売業		3 (8.8)	9 (12.2)	6 (35.3)	4 (9.8)	22 (13.3)
⑥設備, 運輸, 農漁業等		1 (2.9)	6 (8.1)	1 (5.9)	3 (7.3)	11 (6.6)
⑦パート・アルバイト等		8 (23.5)	30 (40.5)	7 (41.2)	13 (31.7)	58 (34.9)
その他		0	2 (2.7)	0	1 (2.4)	3 (1.8)
計		34	74	17	41	166

3) きょうだいの状況

(1) きょうだいの人数及び年齢

きょうだいの職業選択への影響をみるために、きょうだい数、きょうだいの年齢、及び職業について質問した(無回答5名)。きょうだいの人数は、2人きょうだい147名(52.9%)、3人きょうだい111名(39.9%)の順で両者を合わせると258名(91.1%)、1人っ子は9名(3.2%)であった。

年齢は12歳以下が40名(10.1%)、13~18歳が154名(38.7%)であり、19歳以上が118名(51.2%)であった。そのうち30歳以上が4名(1.0%)であった。

(2) きょうだいの職業

次にきょうだいの職業の有無について記述してもらった。その結果は「あり」が115名(28.9%)で、「無し」が283名(71.1%)であった。職種の最多は会社員で50名(43.5%)、自営業13名(11.3%)、その次は医療系9名(7.8%)であった。職業分類①②③に該当する何らかの資格を有した職業についているものは24名(22.2%)であった。

3. 本学への進学に関する状況

1) 本学受験決定時の状況及び進路決定の時期

入学した学生の95.7%が高校を卒業してすぐ入学しており、いわゆる既卒者は8名であった。そのうち就職をしていたが辞めて入学したものは看護学科に2名、保育科、福祉専攻に各1名、栄養専攻にはなかった(表3)。

本学を受験した時の状況について質問した。その結果、本学にしぼって受験したものは203名(72.0%)であり、他校を受験したものは60名(21.3%)、特に看護学科においては他校を受験したのちに本学を受けている者が26名(65.0%)であり、初めから本学にしぼっていたものは11名(27.5%)と他学科に比して約1/3であった。他校を辞めて受験したものはいなかったが、就職希

表3 入学時の状況

人数 (%)

入学時の状況	学科	看護学科	保育科	福祉専攻	栄養専攻	計
高校を卒業してすぐ入学		35 (89.7)	128 (98.5)	31 (96.9)	76 (93.8)	270 (95.7)
他の大学等を卒業したのち入学		1 (2.6)	1 (0.8)	0	2 (2.5)	4 (1.4)
就職していたが辞めて入学		2 (5.1)	1 (0.8)	1 (3.1)	0	4 (1.4)
その他		1 (2.6)	0	0	3 (3.7)	4 (1.4)
計		39	130	32	81	282

望から受験に変更した者は11名、就職していたが辞めて受験したものの3名あった（無回答は1名）（表4）。

また、本学は職業選択という進路決定と関連のある学科が多いため、進路決定の時期について質問した（無回答は2名）。その結果、高校時代が133名（47.3%）で最も多く、中学時代76名（27.0%）、中学入学以前60名（21.4%）、高校卒業以降及び、その他の計は12名（4.2%）の順であった。中学入学前及び中学時代にすでに進路を決めている者が5割以上見られたのは、看護学科の23名（57.5%）、保育科の79名（61.2%）の2学科であり、他の2学科に比して多く、栄養専攻、

表4 本学に決めた状況

人数 (%)

決めた状況	学科	看護学科	保育科	福祉専攻	栄養専攻	計
本学に目標をしぼる		11 (27.5)	103 (79.8)	27 (84.4)	62 (76.5)	203 (72.0)
他校を受験		26 (65.0)	18 (14.0)	2 (6.3)	14 (17.3)	60 (21.3)
他校から本学へ		0	0	0	0	0
就職希望から本学へ		1 (2.5)	5 (3.9)	1 (3.1)	4 (4.9)	11 (3.9)
就職から本学へ		2 (5.0)	0	1 (3.1)	0	3 (1.1)
その他		0	3 (2.3)	1 (3.1)	1 (1.2)	5 (1.8)
計		40	129	32	81	282

表5 進路決定時期

人数 (%)

時期	学科	看護学科	保育科	福祉専攻	栄養専攻	計					
中学校入学以前		10 (25.0)	43 (33.3)	2 (6.3)	5 (6.3)	60 (21.4)					
中学校	1年生	6 (15.0)	13 (32.5)	10 (7.8)	36 (27.9)	0	9 (28.1)	4 (5.0)	8 (10.0)	20 (7.1)	76 (27.0)
	2年生	4 (10.0)		12 (9.3)		6 (18.8)		4 (5.0)		26 (9.3)	
	3年生	3 (7.5)		14 (10.9)		3 (9.4)		10 (12.5)		30 (10.7)	
高校生	1年生	5 (12.5)	17 (42.5)	13 (10.1)	48 (37.2)	2 (6.3)	13 (32.5)	6 (7.5)	52 (65.1)	26 (9.3)	133 (47.3)
	2年生	8 (20.0)		18 (14.0)		5 (15.6)		17 (21.3)		48 (17.1)	
	3年生	4 (10.0)		17 (13.2)		9 (28.1)		29 (36.3)		59 (21.0)	
高校卒業後		0	1 (0.8)	2 (6.3)	2 (2.5)	5 (1.8)					
その他		0	1 (0.8)	3 (9.4)	3 (3.8)	7 (2.5)					
計		40	129	32	80	281					

福祉専攻は高校時代が多かった。とくに高校3年生時にそれぞれ29名（36.3%）、9名（28.1%）となっていた。

2) 本学への進学理由

本学への進学を決定した理由を、①専門的知識や技術を学ぶため、②目指したい職業の免許・資格をとるため、③高校卒業後すぐに就職したくなかったため、④学生生活を送って見たかったため、⑤特に理由はないの5項目をあげ、複数回答可にて回答を求めた。その結果、281名（無回答2名）より342個の回答が得られ（平均1.2個、1個224名、2個53名、3個4名）、その内容は表6のようであった。

最多は、「②目指したい職業の免許・資格をとるため」の226名（66.1%）であり、第2位の「①専門的知識や技術を学ぶため」の63名（18.4%）に比べて163名（47.7%）の差があった。「②目指したい職業の免許・資格をとるため」を学科別にみると、最多は保育科の113名（72.9%）、他の3科も5割強から7割弱であった。「③高校後すぐに就職したくなかったため」は9名（2.9%）、「④学生生活を送って見たかったため」が2.6%、そして、「⑤特に理由はない」の15名（4.4%）でありこれらの合計は34名（9.9%）であった。19名（5.6%）が「⑥その他」としており、その理由は「親にすすめられた」、「他校に落ちた」、「ここなら受かると言われた」、「就職率がよい」などがあった。

4. 本学進学に関する親への相談状況

1) 進学に関する相談の有無と相談者

進学に関する相談の有無をたずねた結果、「相談をした」は266名（94.0%）、「相談しなかった」は13名（4.6%）であった。無回答が4名（1.4%）あったが、全ての科目において9割以上が相談していた（表7）。

次に「相談をした」の266名に、相談者を①父親、②母親、③両親、④教員、⑤友人の5項目あげ、複数回答可にて回答を求めた。その結果、266名より532件の回答が得られた（平均2.0件、

表6 本学への進学理由

進学理由	人数 (%)					
	学科	看護学科	保育科	福祉専攻	栄養専攻	計
①専門的知識や技術を学ぶため		11 (23.9)	23 (14.9)	11 (27.5)	18 (17.7)	63 (18.4)
②目指したい職業の免許・資格をとるため		31 (67.4)	113 (72.9)	23 (57.5)	60 (58.8)	226 (66.1)
③高校卒業後にすぐに就職したくなかったため		0	3 (1.9)	2 (5.0)	5 (4.9)	10 (2.9)
④学生生活を送って見たかったため		0	5 (3.2)	0	4 (3.9)	9 (2.6)
⑤特にこれといった理由はない		1 (2.2)	5 (3.2)	1 (2.5)	8 (7.8)	15 (4.4)
⑥その他		3 (6.5)	6 (3.9)	3 (7.5)	7 (6.9)	19 (5.6)
計		46	155	40	102	342

(複数回答)

表7 進学に関する相談の有無

人数 (%)

有無 \ 学科	看護学科	保育科	福祉専攻	栄養専攻	計
相談した	40 (100)	121 (93.1)	30 (93.8)	75 (92.6)	266 (94.0)
相談しなかった	0	8 (6.1)	2 (6.2)	3 (3.7)	13 (4.6)
無回答	0	1 (0.8)	0	3 (3.7)	4 (1.4)
計	40	130	32	81	283

1件89名, 2件102名, 3件64名, 4件以上11名)。

相談者毎の相談数を各学科の回答者数で割り, 相談者毎の割合をみた(表8)。その結果, 相談した相手で最も多いのは「教員」171名(64.3%), 次いで「両親とも」の146名(52.6%), 「母親」105名(39.5%), 「友人」78名(29.3%)の順であり, 最も少ないのが父親の18名(6.8%)であった。福祉専攻と栄養専攻の父親への相談が2~3%と少なかった。教員への相談は全ての学科において5割以上, とくに看護学科では8割強が相談していた。

2) 本学進学理由と相談者の関係

次に, 本学進学理由と相談者との関係をみた(表9)。

「①専門的知識や技術を学ぶため」は他の相談者に比して, 父親に最も多く相談しており10名(35.7%)であった。「②自分の目指したい職業の免許・資格をとるため」について父親以外の相談は6割以上あった。父親に対しての相談内容については「②自分の目指したい職業の免許・資格をとるため」への相談が最も多く15名(53.6%)であった。「③高校卒業後すぐに就職したくなかったため」については, 相談しなかったものが1名(7.1%)と最も多く, 他には両親8名(4.6%), 友人3名(3.2%)であった。相談しなかった13名中11名の本学進学理由は「②自分の目指したい職業の免許・資格をとるため」であった。

3) 話し合いの状況と満足度

本学進学決定時に相談者がいると答えたもの266名に対し, 話し合ったことへの満足度について質問した結果, 238名の回答が得られた(無回答27名, 無効1名)。

表8 本学進学決定時の相談者

人数 (%)

学科 \ 相談者	看護学科 N=40	保育科 N=129	福祉専攻 N=32	栄養専攻 N=78	計 N=266	
親	①父親	3 (7.5)	12 (9.3)	1 (3.1)	2 (2.6)	18 (6.8)
	②母親	13 (32.5)	55 (42.6)	9 (28.1)	28 (35.9)	105 (39.5)
	③両親	23 (57.5)	58 (45.0)	13 (40.6)	46 (59.0)	140 (52.6)
④教員	33 (82.5)	77 (59.7)	19 (59.4)	42 (53.8)	171 (64.3)	
⑤友人	13 (32.5)	30 (23.3)	6 (18.8)	29 (37.2)	78 (29.3)	
その他	6 (15.0)	5 (3.9)	3 (9.4)	6 (7.7)	20 (7.5)	

(複数回答)

表9 本学進学決定時の相談者と入学理由との関係

人数 (%)

入学理由 相談者	①専門的知識や技術を学ぶため	②自分の目指したい職業の免許・資格をとるため	③高校卒業後にすぐに就職したくなかったため	④学生生活を送ってみたいかったため	⑤特にこれといった理由はない	その他	計
相談なし	0	11 (78.6)	1 (7.1)	0	1 (7.1)	1 (7.1)	14
父親	10 (35.7)	15 (53.6)	0	1 (3.6)	2 (7.1)	0	28
母親	23 (18.4)	83 (66.4)	2 (1.6)	2 (1.6)	7 (5.6)	8 (6.4)	125
両親	30 (17.1)	116 (66.3)	8 (4.6)	6 (3.4)	5 (2.9)	10 (5.7)	175
教員	36 (17.2)	140 (67.0)	5 (2.4)	7 (3.3)	9 (4.3)	12 (5.7)	209
友人	17 (18.3)	60 (64.5)	3 (3.2)	2 (2.2)	6 (6.5)	5 (5.4)	93
その他	5 (20.0)	13 (52.0)	0	2 (8.0)	2 (8.0)	3 (12.0)	25

(複数回答)

「①十分に話し合って分かり合えた」が最も多く129名(48.7%)と約半数みられ、次に多かったのは「②十分に話し合ったが、最後は自分で決めるように言われた」の92名(34.7%)であり、両者を合わせた8割が十分に話し合ったとしていた。また、「③十分に話し合えず、意見が合わなかった」が8名(3.0%)、「④十分な話し合いができず後悔した」が7名(2.6%)であり、話し合いに満足を感じていないのは両者を合わせると15名(5.6%)という結果であった。その他は、「十分に話し合ったが少し後悔が残っている」、「これでよかったのかわからない」などであった(表10)。

4) 進学あるいは職業選定に関する親への相談内容

父親あるいは母親に進学あるいは職業選定について相談したと回答した学生に、その相談内容を記述してもらった内容を抽出した結果150名より183件の内容が抽出された。抽出した回答は①受験校の選定について、②本学を受験することについて、③将来や進路のあり方について、④現在の所属学科に該当する職業の選択について、⑤入学や入学後の自分の能力の不安について、⑥学費等金銭面について、⑦入学後に住むところや通学の交通手段について、の7項目に分類する

表10 相談したことへの評価

人数 (%)

評価	学科	全学科
①十分に話し合って分かり合えた		129 (48.7)
②十分に話し合ったが、最後は自分で決めるように言われた		92 (34.7)
③十分に話し合えず、意見が合わなかった		8 (3.0)
④十分な話し合いができず後悔した		7 (2.6)
⑤その他		2 (0.8)
無回答		27 (10.2)
計		265

ことができた。その代表例は以下のようである。

〈記述内容代表例〉

①受験校選定について

- ・どの学校を受けるか
- ・学費や各学校の特徴でどの学校がよいか
- ・私立か公立か
- ・短大か、大学か

②本学を受験することについて

- ・自分のなりたい職業には資格が必要ということをパンフレットをみせて相談した
- ・家にも近く、将来も生かせる福祉だから
- ・土浦に新しい看護学科ができたので入学したい

③将来や進路のあり方について

- ・将来、何になるために、何の学校に入るか
- ・自分のやりたいことは何か
- ・将来何をしたいのか、聞かれた
- ・将来、何か資格を取っておいた方がいいと思うかどうか

④現在の所属学科に該当する職業の選択について

- ・看護師・保育士・栄養士・福祉関係の仕事をしたいかどうか

⑤入学や入学後の自分の能力について

- ・勉強が大変そうだけれどやっていけるか
- ・合格出来るかどうか
- ・本当に資格がとれるか

⑥学費等金銭面について

- ・入学金、授業料について
- ・お金の面について

⑦入学後に住むところや交通手段について

- ・家を離れて生活することについて
- ・県外であるがどうか
- ・家から通えるところにするのか

学科別相談内容毎の回答数を各学科の回答数で割り、相談内容毎の割合をみた。(表11)

全学科をみると、最も多いのは「将来や進路の選択」の50名(33.3%)、次いで「受験校の選定」43名(28.7%)、「学費等の金銭面」23名(15.3%)であり、最少は「入学や入学後の自分の能力」の8名(5.3%)であった。看護学科では、どこの大学を受けるか、大学か短期大学かとい

表11 職業選択に関して父親，母親への相談内容

人数 (%)

相談内容	学科	看護学科 N=38	保育科 N=60	福祉専攻 N=13	栄養専攻 N=39	計
①受験校の選定について		15 (39.5)	14 (23.3)	2 (15.4)	12 (30.8)	43 (28.7)
②本学を受験することについて		4 (10.5)	12 (20.0)	1 (7.7)	2 (5.1)	19 (12.7)
③将来や進路の選定について		10 (26.3)	16 (26.7)	8 (61.5)	16 (41.0)	50 (33.3)
④所属学科の職業選択について		3 (7.9)	9 (15.0)	0	8 (20.5)	20 (13.3)
⑤入学や入学後の自分の能力について		6 (15.8)	1 (1.7)	0	1 (2.6)	8 (5.3)
⑥学費等金銭面について		11 (29.0)	9 (15.0)	1 (7.7)	2 (5.1)	23 (15.3)
⑦住むところや交通手段について		7 (18.4)	7 (11.7)	0	6 (15.4)	20 (13.3)

(複数回答)

った「受験校の選定」が15名 (39.5%) と最多であるのに対し、他の3学科は「将来や進路のあり方」が最多であった。将来や進路のあり方については、「将来どうするのか」「何が本当はしたいのか」といったものであった。

また、看護学科では「学費等の金銭面」が11名 (29.0%) と第2位であるのに対し、他の学科は7項目中3位あるいは4位であった。「本学を受験」について相談しているのは、保育科が最多で12名 (20.0%) であるのに対し、看護学科、福祉専攻がそれぞれ4名 (10.5%)、1名 (7.7%)、そして栄養専攻は2名 (5.1%) であった。合格できるか、入学してからやっつけられるかといった「(入学や入学後の) 自己の能力の不安」は看護学科が6名 (15.8%) であるのに対し、他の学科は1名 (1.7~2.6%) であった。福祉専攻は回答数が13名であるが、そのうちの8名が「将来や進路のあり方について」をあげていた。

5) 職業選択に関する親への相談の必要性の認識

自分自身の職業選択に際し、親への相談の必要性について質問した結果、「必要あり」は227名 (80.2%)、「必要なし」は31名 (11.0%)、25名 (8.8%) が無回答であった。学科別には、「必要あり」は、看護学科38名 (95.0%)、保育科103名 (79.2%)、栄養専攻59名 (72.8%)、福祉専攻27名 (84.4%) であった。

必要とする理由について、自由記載を求めた結果は、①人生の経験者としての意見、他人の意見を聞くことは大切、②職業選択は大切なこと、③親なのだから、親は心配してくれている、④親に協力してもらうことは不可欠、⑤経済面などの援助が必要、の5項目に分けられ、必要としながら理由を回答しない者も含め、227名より230件の回答があった。話し合いの必要の理由を各学科の回答者数で割り、その割合をみた (表12)。

各項目の代表例は以下のようである。

①人生の経験者としての意見、他人の意見は大切

- ・親はやはり人生の先輩でもあるから、適切なアドバイスをくれるので
- ・いろいろな人の意見を聞くのは大切だから

表12 職業選択にあたって父親，母親との話し合いの必要な理由

話し合いの必要な理由	人数 (%)					
	学科	看護学科 N=38	保育科 N=104	福祉専攻 N=29	栄養専攻 N=59	計 N=230
①人生に経験者としての意見，他人の意見は大切		10 (26.3)	15 (14.4)	3 (10.3)	8 (13.6)	36 (15.7)
②職業選択は大切なことだから		1 (2.6)	9 (8.7)	4 (13.8)	3 (5.1)	17 (7.4)
③親なのだから，親は心配してくれている		8 (21.1)	18 (17.3)	10 (34.5)	15 (25.4)	51 (22.2)
④親に協力してもらうことは不可欠		5 (13.2)	9 (8.7)	0	17 (28.8)	31 (13.5)
⑤経済面などの援助が必要		14 (36.8)	21 (20.2)	3 (10.3)	9 (15.3)	47 (20.4)
⑥理由回答なし		3 (7.9)	29 (27.9)	7 (24.1)	11 (18.6)	50 (21.7)

(複数回答)

②職業選択は大切なこと

- ・将来につながることだから，話し合ってきちんと自分の意見はいつておく
- ・自分も親も納得した上で仕事につきたいから
- ・一生の問題だから

③親だから，親は心配をしてくれている

- ・ある程度親の意見も聞いた方がよいと思う
- ・自分の将来は親も知ってくれていることは大切だから
- ・自分の親だから話したほうがよい
 - ・ 親も心配してくれているから

④親に協力してもらうことは不可欠

- ・自分の意見だけ決めるのはちょっと不安
- ・一人では生きていけないから
- ・自分の夢には親にも協力してもらわないとできないから

⑤経済面などの援助が必要

- ・お金を出すのは親だから
- ・経済的には親に頼らなくてはならない存在だから

理由の最多は「③親なのだから，親は心配してくれているのだから」の22.2%，次いで「⑤経済面などの援助が必要」20.4%，「①人生の経験者としての意見をきくこと，他人の意見を聞くことも大切」15.7%，「④親に協力してもらうことは大切」13.5%の順であり，最も少なかったのは「職業選択は大切なこと」であり，7.4%であった。学科別の特色をみると「⑤経済面などの援助が必要」を理由とするのは看護学科の36.8%が最も多く，第2位の保育科の20.2%とは16.6%の差がみられた。「①人生の経験者としての意見を聞くこと，他人の意見を聞くことも大切」も看護学科が最多で26.3%，他の学科は10～14%であった。「③親だから，親も心配してくれている」福祉専攻が最も多く34.5%，次いで栄養専攻の25.4%，看護学科の21.1%であった。「④親に協力して

もらうことは不可欠」とするのは栄養専攻が最多で28.8%で、他の学科は13.2%、8.7%であった。

「必要なし」とする31名の大半が、「自分の事だから自分で決めるべきである」としていたが、「自分のことは自分で決めたい」と記されたものも少数あった。

6) 職業選択に関する父親、母親からの影響度の認識

親への相談の有無に関わらず、何らかの意味で職業選択に関して父親、母親からの影響を受けているか否かについて、「大いに受けた」「少し受けた」「まったく受けない」にわけて質問した。その結果、「大いに受けた」は最も少なく44名(15.5%)、「少し受けた」は92名(32.5%)、「まったく受けなかった」が最多で121名(42.8%)であった。無回答は26名(9.2%)であった。看護学科においては「大いに受けた」が最多であり16名(40.0%)、最小は福祉専攻の3名(9.4%)、他の2学科も10%前後であった。他の3学科は「大いに受けた」はいずれも最も少なかった(表13)。

また、影響を受けた相手(父親・母親)について聞いた結果は、93名(34.3%)が無回答であったが、母が111名(41.0%)、父親が28名(10.3%)であり、母親が父親の約4倍と多かった(表14)。影響された事柄についての問いには無回答が多かったが、記述されたものには以下のことがあげられていた。父親からの影響のされ方は、父親の懸命に働く姿から、自分らしく生きている姿から、父からの学校選びに関する問いかけ及び職業選択を具体的に提案してくれたことなどがあげられていた。母親からは、母親が看護師であるからあるいは保育士であるからのように、

表13 父親、母親からの職業選択に関する影響度

		人数(%)				
決めた状況	学科	看護学科	保育科	福祉専攻	栄養専攻	計
大いに受けた		16 (40.0)	13 (10.0)	3 (9.4)	12 (14.8)	44 (15.5)
少し受けた		11 (27.5)	50 (38.5)	11 (34.4)	20 (24.7)	92 (32.5)
まったく受けなかった		13 (32.5)	55 (42.3)	18 (56.3)	35 (43.2)	121 (42.8)
無回答		0	12 (9.2)	0	14 (17.3)	26 (9.2)
計		40	130	32	81	283

表14 職業に関する影響度の相談相手別認識状況

		人数(%)			
相談者	影響度	大いに受けた	少し受けた	まったく受けなかった	計
父		5 (9.4)	10 (10.3)	13 (10.7)	28 (10.3)
母		28 (52.8)	28 (28.9)	55 (45.5)	111 (41.0)
両親		3 (5.7)	1 (1.0)	35 (28.9)	39 (14.4)
無回答		17 (32.1)	58 (59.8)	18 (14.9)	93 (34.3)
計		53	97	121	271

(複数回答)

表15 職業選択に関する母親からの影響のされ方

人数
N=25

	看護学科	保育科	福祉専攻	栄養専攻	計
①母親が選択した職業である	8	3	1	2	14
②日常の母の姿から	2	1	1	1	5
③アドバイスの内容・仕方	0	1	2	1	4
④母の要望	1	0	1	0	2

選択しようとする職業と同一あるいは近似の職業をもつことが最も多く、その他、母親のなりた
い職業だったからなどがあつた。とくに、看護学科では6名が母親が看護師であるからとしてい
た。また、母親の在宅介護の姿から（福祉専攻）、健康を考えた食事づくりをする姿から（栄養専
攻）などのほか、日常生活の真剣な姿からの影響をもあげられていた（表15）。

5. 本学での学生生活に対する認識

多くの学生が、資格をとって働きたい、免許を持ってできる仕事につきたいことを動機として
通学してきているが、果たして学生は本学の学生生活をどのように認識しているのかを知るため
に、いくつかの質問をした。

まず、「学生生活は楽しいか」に対しては、84.2%が楽しいと答えている。「いいえ」の回答は、
看護学科17.5%、保育科18.0%、栄養専攻11.4%であり、福祉専攻では「いいえ」と答えるものは
いなかった。

次に、「勉強は楽しいか」に対しては、40.3%が「はい」、56.8%が「いいえ」と答えている。
「いいえ」は、栄養専攻67.5%、福祉専攻59.4%、保育科54.8%、看護学科40.0%の順であつた
（無回答10）。また、目標に向けての学習の進み具合について聞いたところ、「順調にすすんでい
る」は48.0%、「順調にすすんでいない」は49.9%とややすすんでいないとする者が多かつた。「ど
ちらともいえない」が2.6%であつた（無回答12）。

「友達はできたか」には、98.2%が「はい」としている。「教員によく相談ができてきているか」に
ついては、「はい」は34.1%、「いいえ」は64.5%であつた。「はい」は看護学科52.5%、保育科
37.6%、福祉専攻25.8%、栄養専攻22.1%の順である。

また、自由記載にて、大学に対する意見等を記述したものは、63名であり、その内容は、コピ
ー機の設置、ロッカーの設置（保育科のみ）、売店の充実、学生食堂の開設など設備面に関するも
のが最も多く、その他、教員の教育姿勢に対する要望、学生の私語に対する不満であり、中には、
もっと学校の価値を高めてほしいと記したのもあつた。

VI. 考察

本調査は、資格取得を可能とする学科の多い本学における学生の入学動機について知ることであり、学生への関わりを考えることを目的とした。そして、調査結果より以下の3点に関して示唆を得ることができた。

1. 入学時の学生の本学への入学動機が示す教員に求められる関わり

本学への進学を決定した理由の第一位は「目指したい職業の免許・資格を取るため」226名(66.1%)であり、次いで「専門的知識や技術を学ぶため」63名(18.4%)であり、両者を合わせると約85%が、資格取得に関する理由である。また進学あるいは職業選択にあたっての親への相談内容は、「将来や進路について」が33.3%と最も多く、「本学の受験について」は12.7%であり、具体的に資格をとるために本学を受けたいという相談が多い。そうした資格を取りたいという進路決定時期は、高校時代に47.3%であるが、中学時代に27.0%で、そして中学入学以前に21.4%がすでに進路を決定していたと述べている。

若者のフリーターの増加が社会的問題とされている現状のなかで、本学に入学している学生はすでに将来に向けての自身の生き方を考えて生活していこうという意志をもっての入学であり、こうした動機をもって入学してくる学生が、それぞれの希望にかなった資格が取得できるように支援するのが本学の教員の役割の重要な視点であることを再認識させられる結果である。

学生は、自身の生活設計を学生なりに思考していることは確かである。しかし、今回の調査では、それぞれの資格・免許を取得することについて理由はきいてはいないが、果たして学生が免許や資格をもつということの社会的責任についてどのように認識しているかは定かではない。そこで、学生には、入学の時点で、免許をもつことの責任についての自覚をもてるように関わっておくことも重要である。免許とは広辞苑では、「特定の事を行うことを官から許すこと。政府の許可。政府が特定の人に特定の事を許すこと」であり、免許を取得するということはその専門性を期待され、信頼される存在である。専門職とは「そのなかでの責任と権限をもっている。」⁴⁾である。それゆえ、本学学生には免許のもつ者の「責任」について自覚できる関わりも欠いてはならない教育の視点である。学生は、進路選択について親に相談する理由について、「(進路選択は) 大事なこと」としている者、「(親は) 人生の経験者として意見をきくことは大切」としている記述がある。これらは、明確にできていないまでも、生きること、仕事をもつことへの真摯な気持ちをもっているということであると考え、これらの学生の認識を大切にとりあげ、責任にまで深めていくことが重要である。

学生の大半は、現在の学生生活について「楽しい」としている者が大半ではあるが、なかには教員に対し、「もっと熱心に授業をしてほしい」や「入学したことを後悔している」という声もあり、また「教員によく相談できているか」について64.5%ができていないと回答している。クラ

ス担任の役割を明確に学生に示す、オフィスアワーを設けるなどの工夫をより行い、学生の個々の動機を知り、それを大切に育てていかなければならないことを再確認できた。

2. 職業選択あるいは進路決定への家族の関与と教員の関わりとの関係

では、進路決定あるいは資格取得に関していかなる相談相手を得ているのか。一学生の相談相手は複数者であることが多い結果であるが、そのうち、教員に相談している者が64.3%と最も多く、次いで両親が52.6%、母親39.5%の順であり、父親のみをあげるのは6.8%であった。何らかの形で親に相談している者が多い。

中学時代までに約半数が進路決定している状況においては、親の影響は必至である。であるから、親と相談し本学へ資格取得を目的として入学してきた学生については、親にどのように、何を相談しているのかを知り、最も大切な支援者であってほしい家族の思いを大切にしておくことも教員にとって重要なことと考えられる。

では、学生は進路決定あるいは資格取得に関して、親にいかなる相談をしているのであろうか。父親に相談が少ないのは、話し合う時間の問題と、本学は女子学生が大半であることにより、同性である母親への相談が多いためと考える。そこで、母親の就業状況についてまず考えてみた。母親はパートを含めると73.2%が就業している。これは平成13年総務省統計局「労働力調査」女性の年齢階級別労働力率45～49歳が72.7%であるのに比して多いとは言えない。何らかの資格をもっている母親は全学科で22.3%、とくに看護学科においては35名中10名が看護職であった。また、保育士、介護士をめざす学生の中には、「母親も幼稚園の教員だったから」「母親がなりたいた職業だったから」といった直接職業に関するもののほか、「母親が在宅の（親）を介護する姿から」、そして栄養士をめざす者には、「母親が健康を考えた食事作りをする姿から」などといった日常の母親の生活姿勢から影響を受けていることもわかった。

進路相談あるいは資格取得について親に相談している者が5割～6割強であったが、学生は親への相談の結果、親の意見にどのように影響を受けているのだろうか。相談をした者に相談結果の影響について聞いた。その結果は「まったく受けなかった」は42.8%である。そして、その理由のほとんどが、「自分のことだから、自分で決める」、あるいは「自分のことだから自分で決めたい」と記している。これは、影響を受けていないというより、自分で決めたいという自立への意志の一端として読みとれる。実際に、親への相談の必要性について自由記載の内容では、「親なのだから、親も心配してくれているから」が、22.2%、「人生の経験者としての意見、他人の意見は大切」が15.7%、また、「経済面などで援助が必要だから」が20.2%と言う結果もある。つまり多くの学生は「親だから」として、「ある程度親の意見も聞いた方がよいと思う」「自分の将来は親も知ってくれていることは大切だから」「自分の親だから話したほうがよい」などに代表される意見を通して、親への感謝や親への当然の義務として相談していることにより、家族関係に

において非常に大切な関係が取れているということが伺えた。

興味深いのは、親の意見を聞くことの必要性について、「人生の先輩としての意見」として、また「他人の意見を聞くこと」の大切さをあげていることである。これは、親であるということを超えて、ひとりの人間として親を見ようとしている、あるいは見たいという青年期の特徴と同時に、現在の家庭における親のあり方が推測できる結果でもある。親を「適切なアドバイスをくれる」存在と認識している意見もあり、親がわが子と対等に接している結果ともいえよう。あるいは、親が言明をさけている、あるいは迷っているという現実も十分予測できる。がいずれにしろ、学生の声からは、人間社会の基本である他者を意識しているという姿が多く見られ、このことは人間対人間の相互作用や、より良い人間関係を築く上での非常に良い視点を持っている学生が多いと言えるのではないだろうか。こうした学生の思いを大切に、自立とは言うが協働社会のなかで栄養専攻では作り手と食べ手、栄養管理者と調理師との関係、看護学科、福祉専攻では看護者と患者との関係で、保育科では、保育士と子どもとその親との関係の中に学生の姿勢を尊重して行きたい。このことより学生の真の自尊心・自己信頼の高まりを育てていけるのではないだろうかと考えられる。

以上のことから、学生と親との関わりは非常に重要である。そのため教員は入学式、紫峰祭などで親と歓談し合う機会を設けることによって、家庭と連携して有能な資格を持った専門職である社会人を育てることが出来るのではないだろうか。

3. 高校の進路相談の教員の進路・職業選択に関する考え方を知る必要性

進路選択について最も多く相談していたのは教員の64.3%であった。教員とは、高校の担任教員あるいは進路指導担当の教員であろう。これは学生が主体的に相談に行くということばかりではなく、今、高校教員にとって進路相談は重要な役割であるために、教員が積極的に高校生に関わっている結果とも考えられる。そして、進路決定にあたっては、入学試験との関係を考えると、高校の学級担任教員や進路指導教員の助言が大きく影響していることが十分考えられる。そこで、本学教員もまた、高校における教員の進路決定に関する指導内容、あるいは学生の相談内容等について積極的に情報を集める他、本学の教育姿勢を伝えるために、出張講義等を引き受け、本学に進学した学生の多い高校にもっと積極的な関わりをもち、教員と連携して学生の将来のために協力していくことが重要であることを認識することができた。それにより入学してきた学生を迎え入れる準備状況を作る努力の必要性が示唆された。

Ⅶ. おわりに

今回各学科の1年生の協力を得て、学生への本学入学に関する意識調査を行った。福祉専攻、看護学科はそれぞれ32名、40名と少数ではあったが、それなりに調査より学生の気持ちや希望を

知ることができた。

今回の調査は、各科講義終了後に教員の承諾を得、集合調査にておこなったが、質問量に対し十分な時間が取れず、理由を聞く等の自由記載に関する無回答が多かった。今後は質問量に合わせた記入時間をとるといった配慮を考えていく必要がある。

調査結果により、学生は真剣に進路を決めて本学に入学してきていることがわかった。こうした学生の思いを大切にしておくことの必要性が再認識できた。また、看護学科の教員は本学での教育の初年度にあり、看護学科のみならず他学科の学生のニーズを知りえたことは貴重なことであった。今後も調査を継続して、学生の思いを知り、学生個々に応じた対応ができる教育のあり方を考えていきたい。今回は実態のみの報告であり検定等はおこなっていない。

最後にご協力くださいました283名の学生、教員の皆様に感謝いたします。

〈引用文献〉

- 1) 岡本祐子, 松下美知子: 新 女性のためのライフサイクルの心理学, 福村出版, p 88, 2002
- 2) 前掲 1) p 88
- 3) 柏木恵子, 伊藤美奈子: 女性のライフデザインの心理①自分らしい生き方を考える, 大日本図書, p 92, 2001
- 4) 波多野梗子, 小野寺杜紀: 看護学「1」看護学概論, 医学書院, p 212, 2001

〈参考文献〉

- 1) 陣田泰子, 竹内文生他: 看護学生の職業意識に対する意識調査—開学から3年間の比較—, 川崎市立看護短期大学紀要, p 11-25, 1998
- 2) 酒井志保, 大島弓子: 本学看護学科学生の学校及び看護学科選択理由の検討, 日本赤十字秋田短期大学紀要, 第3号, p 45-51, 1998
- 3) 酒井志保, 滝内隆子: 看護学生の受験理由と看護学科選択理由に関する実態(第2報)—本学看護学科2期生の入学時調査から—, 日本赤十字秋田短期大学紀要, 第2号, p 33-41, 1997